

中世の多摩を歩いてみませんか

JR青梅線に揺られていくと、みどり豊かな景色が目の前に広がっていきます。この辺りは、鎌倉時代から戦国時代まで三田氏という地方豪族が支配しており、周辺の寺社や城館に数々の足跡を残しました。また、三田氏が平将門の後裔と称していたこともあってか、平将門にまつわる伝承も数多く残されています。

今回は、青梅・羽村・昭島にある中世を感じられる文化財を中心に、文化財めぐりコースを設定しました。文化財を彩るみどりとともに、歴史豊かな多摩地域の新しい魅力を発見してみてください。

東京都



『青梅鉄道沿線各所図絵』(抜粋)
©青梅市郷土博物館

公開情報

海禅寺境域

公開日 通年
公開時間 6:00 ~ 16:00
料金 なし

金剛寺

金剛寺の青梅
金剛寺表門
公開日 通年
公開時間 7:00 ~ 17:00
料金 なし

天寧寺境域

公開日 通年
公開時間 6:00 ~ 16:30
(夏季は17:00まで)
料金 なし

勝沼城跡

公開日 通年
公開時間 終日
料金 なし

塩船観音寺

観音寺本堂
公開日 通年
公開時間 8:00 ~ 17:00
料金 金 100円

観音寺仁王門
観音寺阿弥陀堂
木造金剛力士立像
木造二十八部衆立像
塩船観音の大スギ

公開日 通年
公開時間 8:00 ~ 17:00
料金 金 なし

阿蘇神社

阿蘇神社本殿
阿蘇神社のシイ
公開日 通年
公開時間 9:00 ~ 16:00
料金 金 なし

まいまいず井戸

公開日 通年
公開時間 終日
料金 金 なし

大日堂及び日吉神社

木造金剛力士立像
拝島のフジ
大日堂境域及び日吉神社境域
公開日 通年
公開時間 終日
料金 金 なし



〒163-8001 東京都新宿区西新宿二丁目8番1号
電話:03(5321)1111(代)
教育庁地域教育支援部管理課





海禅寺境域

都指定史跡

昭和 11 年 3 月 4 日 標識
昭和 27 年 4 月 1 日 史跡指定
昭和 30 年 3 月 28 日 旧跡指定
昭和 60 年 3 月 18 日 史跡指定
平成 22 年 3 月 23 日 追加指定

瑞龍山海禅寺は、多摩川を望む山麓に位置し、僧益芝永謙が寛正年間(1460-65)に営んだ長勝庵と呼ばれる草庵が始まりといわれます。その後、この地の豪族三田氏の庇護の下、堂宇が整備され、長勝山福禅寺と称しました。代々三田氏の崇敬厚く、境内西側の山腹には歴代の三田氏を祀ったといわれる宝篋印塔・五輪塔の一群が残されています。

永禄4～6年頃(1565～67)、小田原北条氏と対立した三田氏は、本城であった勝沼城を出て、当寺の後方の雷電尾根上に位置する天険の山城辛垣城に居を移します。北条氏の攻撃で辛垣城は落城、三田氏は滅亡しましたが、この時に海禅寺の伽藍も兵火で焼失してしまいました。その後、天正17年(1589)に再興され、2年後の天正19年には徳川家康によって15石の所領が安堵されています。この時、現在の寺名に改められました。

その境域は多摩地域の禅宗山岳寺院の典型例であり、現在も慶長17年(1612)建立の総門(青梅市指定文化財)や寛政5年(1793)再建とされる山門など、江戸時代の建築が残されています。

多摩川を挟んだ対岸には、『新・平家物語』で知られる国民の人気作家、吉川英治記念館があります。後方には三田氏の終焉の地である山城、辛垣城があります。



海禅寺山門



三田氏供養墓



金剛寺の青梅

都指定天然記念物

大正 11 年 6 月 指定

JR 青梅駅から西へ750m程向かったところにある金剛寺境内の本堂前に、「金剛寺の青梅」という1本のウメの木があります。

伝説によると、平将門がこの地に立ち寄った際、馬の鞭としていたウメの枝を地に挿し、「我願成就あらば栄ふべし。しからずんば枯よかし。」と誓ったところ、枝は根を張り、葉を繁らせたため、将門は喜んで仏閣を建てたとされています。そしてこのウメが「金剛寺の青梅」だと言われています。

ウメはバラ科の落葉小高木で、中国原産のものが奈良時代以前に日本に渡来し、広く栽培されるようになったとされています。通常、その果実は熟して落下します。ところがこのウメは、夏を過ぎても青いままになっているということで、そのことが「青梅」という地名の謂れとなったと言われています。

なお、この現象は、植物学上で「稚態保留」と呼ばれるもので、稀に存在する現象だそうです。



金剛寺の青梅



金剛寺表門

都指定有形文化財(建造物)

昭和 36 年 1 月 31 日 指定
昭和 51 年 7 月 1 日 種別名変更

平将門がこの地に梅の一枝を挿し、根付けば一寺を建立するとの誓いを守って建てたと伝わるのが、青梅山無量寿院金剛寺です。寺名は遍照金剛(空海の灌頂号)にちなみます。

将門の後裔を自称する三田氏の衰退後は、小田原北条氏の帰依を受け隆盛し、徳川氏からも朱印状が寄せられ20石を与えられました。しかし天保12年(1841)に諸堂宇が焼失、わずかに表門と鐘楼が被災を免れたといえます。寺には「絹本着色如意輪観音像」(重要文化財(絵画))のほか、多くの文化財も存在します。

表門は、明治初期に街区整理により現在地に移されました。一間一戸の四脚門で、切妻造、瓦葺銅板葺で、旧状を良く保っています。

意匠的には妻面が見所で、大きな板葺腰や、柱頂部の木算や拳算の絵様の特徴から17世紀中頃の建築と考えられます。小規模ながら、和様を基調に、丸柱上下に粽(丸く擡めること)を付けるなど禅宗様の要素も取り入れた作となっています。



金剛寺表門



天寧寺境域

都指定史跡
大正 14 年 5 月標識
昭和 27 年 4 月 1 日史跡指定
昭和 30 年 3 月 28 日旧跡指定
昭和 35 年 4 月 1 日種別変更及び名称
変更

高峰山天寧寺は、元々この地にあった平将門創建と伝えられる真言宗高峯寺の地に、当地の領主三田氏が文亀年間（1501-04）に創建した禅宗（曹洞宗）寺院です。南東方向には三田氏が本拠とした勝沼城が位置しています。『新編武蔵風土記稿』によれば、江戸時代には、寺領 20 石、末寺 37 を擁する大寺でした。

丘陵地の谷合い、境内には現在も江戸時代の伽藍建築が多く残り、中世以来の禅宗寺院構造を良く伝えています。総門を入ると、参道沿いに土塁が残り、左に折れると楼門形式の山門、中雀門を経て本堂（法堂）に至ります。山門は宝暦 10 年（1760）、中雀門は嘉永 6 年（1853）、本堂は宝永 4 年（1707）の再建です。なお、伽藍の多くは元々茅葺でしたが、現在は銅板葺に改められています。

鐘楼には三田政定の寄進した大永元年（1521）の銘を有する銅鐘が残されています。「平氏朝臣／将門之後胤／三田彈正忠政定」の銘文が見られ、三田氏が平将門の子孫を名乗っていたことが知られます。都内でも珍しい中世に遡る工芸品として、国重要美術品となっています。



天寧寺境域



勝沼城跡

都指定史跡
大正 14 年 5 月標識
昭和 27 年 4 月 1 日史跡指定
昭和 30 年 3 月 28 日旧跡指定
平成 5 年 3 月 22 日種別変更

中世青梅地域を支配した豪族三田氏が拠点とした城が勝沼城です。霞川に臨む丘陵の上に位置し、空堀と土塁で郭を区画した典型的な中世城郭です。北西方向には三田氏の崇敬した天寧寺が位置しています。

三田氏は平将門の子孫と称し、室町時代から有力領主として、この地に勢力を張っていました。室町後期以降、この地は上杉氏、北条氏両者の勢力圏の境界にありましたが、永禄 4 年（1561）上杉謙信（長尾景虎）の関東侵攻時に上杉方に属したことをきっかけに北条氏照に攻められ、三田氏は滅亡することとなりました。

江戸時代後期に記された『新編武蔵風土記稿』によれば、三田氏滅亡後は北条氏の家臣師岡山城守が居城としたとされており、師岡城の別名も持ちます。現在残されている城は、その構造から

みて、北条氏勢力によって修築されたものと考えられています。東西に並ぶ大きな三つの郭を中心に、近世城郭につながる原初的な馬出しや虎口などの遺構が良好に残されています。

現在、一円は東京都の歴史環境保全地域にも指定され、歴史的遺産と併せてその良好な自然が保護されています。

※健脚な方に限ります。



勝沼城推定復元俯瞰図（南東から）



観音寺本堂

重要文化財（建造物）
昭和 21 年 11 月 29 日指定
昭和 38 年 2 月 13 日名称変更

塩船観音境内の丘陵地の中程の、やや広く平らに整地された場所に本堂（観音堂）があります。

本堂は寄棟造、茅葺、桁行・梁間とも 5 間（約 12 m 四方）の比較的大きな建物です。外観は非常に簡素で、外周を板壁と板戸で囲い、床は板敷、天井も鏡天井とする閉鎖的な空間です。内部は「結界」と呼ばれる格子戸の中敷居で二分され、手前を外陣、奥を内陣とする、いわゆる密教堂形式の平面を持ちます。内陣周りには来迎壁と須弥壇を構え、来迎柱上部の組物は和様を基調に禅宗様が加味されたものです。このような建築形式と木鼻の絵様の形状から、室町時代後期の建築と推察されます。

また須弥壇上の厨子は、大変に精緻で優れた意匠です。この厨子に安置される本尊千手観音は、永正 9 年（1512）に、杉本坊（塔頭十二坊の一つ）を願主に、三田氏宗とその子息・政定らを檀那として修理されたことが、台座の銘文に記されています。



観音寺本堂



観音寺仁王門

重要文化財（建造物）
昭和 21 年 11 月 29 日指定
昭和 38 年 2 月 13 日名称変更

塩船観音の境内入り口の、平地から丘陵地に差し掛かろうとする場所に、仁王門は建っています。

規模は桁行 6 m、梁間 3.6 m で、切妻造、茅葺の三間一戸八脚門とし、中央には扉を入れず上部に「大悲山」の扁額を掲げ、両脇間に仁王像を安置します。建立年代は不明で、『新編武蔵風土記稿』には寿永 3 年（1184）の棟札があると記されますが現存せず、天文 2 年（1533）に三田政定・綱定が仁王を修理した時の棟札が残ります。

本堂と細部意匠を比べると、時代が少し下った室町時代末期の建築であると考えられます。比較的立ちが高く、組物も多用しない簡素な造りなどで、妻面（側面の上部）の中央柱を通し柱とするのが特徴です。



観音寺仁王門



観音寺阿弥陀堂

重要文化財（建造物）
昭和 21 年 11 月 29 日指定
昭和 38 年 2 月 13 日名称変更

阿弥陀堂は、塩船観音の入口、仁王門の少し奥に建っています。寄棟造、茅葺形銅板葺で、板張りの簡素な外観です。見かけは桁行 3 間、梁間 4 間ですが、間口 1 間、奥行 2 間の内陣の四周に 1 間の庇を巡らせた、いわゆる阿弥陀堂形式の堂宇です。内陣は、後ろ半分を板壁と格子戸付中敷居で囲った仏壇の構えとします。内陣柱頂部の木算絵様も古様ですが、本堂と比べると時代は少し下って室町時代後期の建築と推察されます。

また、天井が内陣のみに張られていることや、外側に縁が巡らない不自然な納まりであることから、未完の建築であったと考えられています。中世末、永禄 6 年（1563）頃に三田氏が没落したことと、無関係ではないかもしれません。

阿弥陀堂に関しては、『新編武蔵風土記稿』に慶長 15 年（1610）の棟札があることが記され、昭和 37 年修理では内陣格子戸の部材から寛永 18 年（1641）の墨書が発見されています。



観音寺阿弥陀堂



木造金剛力士立像

都指定有形文化財（彫刻）
昭和 35 年 4 月 1 日指定
昭和 51 年 7 月 1 日種別名変更

寺域の正式な入り口である仁王門の左右には、伽藍と仏法を守護する金剛力士像一対が安置されています。ヒノキ材寄木造りによる筋骨たくましい上半身裸形の像で、一喝するように口を開けた阿形は屈臂した左手に独鈷杵を握り右手は五指を開いて押し下げ、口をきつく結んだ吽形は左手を拳に握り右の掌は力強く正面に向け、忿怒をあらわに斜め内側を睨みつけ山門を通る仏敵を威圧しています。

その制作時期については『新編武蔵風土記稿』に寿永 3 年（1184）造立と記された棟札があったと伝えられていますが、顔貌や筋肉の表現、褶の縁や衣文線などに本堂に安置されている木造二十八部衆立像との共通点が多く、恐らく同じ鎌倉時代後期に仏師定快の工房で制作されたものと考えられます。附の天文 2 年（1533）の修理棟札は、鎌倉仏師円慶が修理を行ったことを伝えています。



木造金剛力士像 吽形



木造金剛力士像 阿形



木造二十八部衆立像

都指定有形文化財（彫刻）
昭和 58 年 5 月 6 日指定

本尊千手観音の左右に安置された二十八部衆は千手観音の眷属で、千手観音とその信仰者を護る御法善神です。多くは古代インドの神々に起源を持ち、貴顕、天女、武将、鬼神、力士、獸面など様々な姿をしています。二十八部衆像が揃った現存最古の例としては京都蓮華王院三十三間堂の作例が知られ、観音寺の作例はこれに次ぐものです。

いずれもヒノキ材割剥造で彩色若しくは漆箔が施されています。23 軀が鎌倉時代の作で、像内の墨書銘より文永 5 年（1268）から弘安 8 年（1288）の 20 年をかけて仏師定快の一門によって造像されたことが知られます。そのうち、象頭冠をつけた五部淨居天、三面六臂の阿修羅王、鳥相の迦楼羅王など 7 軀に定快の銘が記されています。

室町時代の永正年間（1504-20）には三田氏宗を再興施主として、仏師弘円により 5 軀が補像されました。永正 9 年（1512）の功德天の修理の折、この像が建治 2 年（1276）に早逝した金子十郎の子息・金丸の追善のために造像され、像内にその遺髪が仏舎利として納められていることが判明します。哀惜の意を表してこの像を再興した氏宗は「そのかみのまことは今もしられぬる くちぬかうちにかはる御仏」の和歌と詠じて銘札裏面に記しました。



木造二十八部衆立像



木造二十八部衆立像



塩船観音の大スギ

都指定天然記念物
昭和 28 年 11 月 3 日指定



塩船観音の大スギ

花の寺としても知られる大悲山観音寺。その本堂である観音堂へと向かう石段の左右の斜面地に、一対の大きなスギの木があります。スギやクスノキから成る観音寺の社叢の中でも特に大きなこの 2 本のスギが「塩船観音の大スギ」で、別名「塩船観音の夫婦杉」とも呼ばれています。

樹高は左のスギが約 43 m、右のスギが約 40 m、幹周りは左が約 5.7m、右が約 6.6 m あります。いずれも都内でも有数のスギの巨樹であり、「高尾山の飯盛スギ」や「奥多摩の氷川三本スギ」等と共に、都指定天然記念物となっています。

スギは国内では本州から四国・九州（屋久島まで）の主に太平洋側に見られる常緑高木です。材は建築や日用品など様々な場面で使用され、また神聖な木として神社の境内等に植えられることも多く、日本人にも馴染みの深い樹木の 1 つです。

コラム 塩船観音を歩こう

観音寺は真言宗醍醐派大悲山と号し、通称、塩船観音寺として親しまれています。寺蔵の寛延4年(1751)の縁起によれば、大化年間(645-50)に若狭の八百比丘尼が関東に來遊し、この地に1寸8分(約5.4cm)の千手観音を安置したことが寺の始まりとされています。八百比丘尼は人魚の肉を食べたため800歳まで生きたという伝説の尼僧で、宝徳元年(1449)、若狭から京都に現れたという記事が「臥雲日件録」(相国寺の僧瑞深尚鳳の日記)にあります。

また、天平年間には行基(?-749)が荒廃した堂宇を再興、地形が船形に似ていることから塩船と名付けたと言います。さらに比叡山の僧安然が観音堂(本堂)を再興し、阿弥陀堂と薬師堂の2堂を建立したほか、塔頭十二坊を整え、鎮守の七社権現を勧進し、寺運は隆盛したと伝わります。

塩船の丘陵には、今も本堂・阿弥陀堂・仁王門(全て重要文化財(建造物))のほか山王七社権現・薬師堂・鐘楼等が巧みに配置され、密教寺院の山地伽藍を形成しています。現在は、春のつつじまつりを始め、あじさいや萩など四季の花咲く寺として親しまれています。



阿蘇神社本殿

都指定有形文化財(建造物)
昭和41年3月31日指定
昭和51年7月1日種別名変更

羽村市の西端部は、多摩川沿いに美しい景観が広がる地域です。羽加美の阿蘇神社は古くからの鎮守社で、社伝によれば、氾濫する川を鎮めるため肥後国から阿蘇大明神が現れたといます。平将門や、将門を討った藤原秀郷による社殿造営の伝説も残ります。その後は北条氏、三田氏に庇護され、棟札には、天文5年(1536)に三田定重が社殿の7回目の改修を行ったことが記されます。

現本殿は、延宝4年(1676)、村落の人々が寄進し再建したものです。主要材はケヤキ、規模は、一間社流造、間口1.45m、高さ約4mです。正面に浜床と木階を設け、三方に縁を廻し、屋根は柿葺きです。装飾は少ないながら虹梁の曲線等が優美です。ただし、髹漆彫刻は建築に比べて古い様式で、前身建物の材である可能性が有ります。本殿の柱の底部からは、大野市郎衛門と太郎衛門の二人の大名の名が発見されています。建築年代も明らかで、この地域の神社建築の指標となる建物として貴重です。



阿蘇神社本殿 外観

阿蘇神社本殿 内部

阿蘇神社のシイ

都指定天然記念物
昭和6年1月29日指定

多摩川左岸の羽村市羽加美にある阿蘇神社。拝殿に向かって左奥、多摩川に面した境内地に、神社の御神木でもあるスダジイの巨樹があります。

阿蘇神社は推古天皇9年(601)に創建されたとされており、その後、平将門が社殿を造営、更にその将門を討った藤原秀郷が、天慶3年(940)に将門の霊を鎮めるために社殿を建て替えたと言われています。その際に、藤原秀郷がこのシイを植えたとされています。

樹齢は1000年を超えているとも言われ、昭和41年の台風で大枝が折れ、幹内部の空洞化が進むなど傷だらけではありますが、樹高約18m、幹回りは約6mで、今日もお多摩川の河岸に大きく枝葉を下ろした姿が見事です。



阿蘇神社のシイ



まいまいず井戸

都指定史跡

昭和 27 年 11 月 3 日史跡指定
昭和 30 年 3 月 28 日旧跡指定
昭和 36 年 1 月 31 日種別変更

武蔵野台地は、地下水脈が深く、水を得るためにはくずれやすい砂礫層をかなりの深さまで掘り下げる必要がありました。江戸時代中期以前は、垂直な井戸を深く掘ることは難しく、そのために考案されたのが、この「まいまいず井戸」です。

まいまいず井戸は、その形がまいまい（この地域の言葉で「かたつむり」のこと）のように見えるところからきた呼び名です。地面をすり鉢状に大きく掘りくぼめ、その底の部分から短く垂直に井戸を掘っています。井戸枠までは斜面を廻るように道が設けられ、あたかもかたつむりのうずまきのように見えます。

地表面での直径は約 16m で底面の直径は約 4m、深さ約 5.5m の窪地の中央に直径約 1m、深さ約 7.4m の掘り井戸があります。

この井戸が掘られた年代は確実ではありませんが、井戸の中から鎌倉・室町時代の板碑が出土していた記録があることから、中世に遡る可能性があります。側にあった熊野神社（現在の五ノ神社）と共に、村落の中心的な施設として使用されてきたものと考えられています。

同様の構造を持つ井戸は、青梅新町の大井戸など多摩地域に多く見られるほか、八丈島（「八重根のメットウ井戸」（都指定史跡））にも見られます。



まいまいず井戸

コラム 大日堂・日吉神社周辺を歩く

大日堂はかつて拜島山密蔵浄土寺と号し、寺伝によると天曆 6 年（952）多摩川の大洪水の折に大日如来像が中洲に流れ着いたのを始まりとしています。その後、天正年間（1573-93）に滝山城（八王子市高月町・加住町・丹木町）の鬼門よけとして現在地に移され、滝山城主北条氏照の下臣石川土佐守が娘の眼病平癒のお礼として、堂宇を再建したとされます。

江戸時代には「浄土寺」の寺号は消滅し、享保 17 年（1732）に大日堂を再建した際、現在と同様の伽藍配置とし、「大日八坊」の一つの普明寺が別当として護持に当たりました。日吉神社の創建は不明ですが、天正年間（1573-93）に守護社の「山王大権現」として建立されたと言われます。明治に入り神仏分離により大日堂（別当普明寺）と日吉神社に分離されますが、天台宗の御堂と天台宗の守護社である日吉神社が一山に残ります。

多摩川に臨む段丘面（ハケ）の上段に主要堂宇（大日堂・薬師堂・日吉神社拝殿・本殿）を構え、低地部には仁王門（昭島市指定有形文化財）やおねいの井戸（昭島市指定旧跡）、拜島のフジ（都指定天然記念物）などが配されます。日吉神社の西隣には富士塚も残されており、諸堂の仏像や鎮守の杉林なども含め、貴重な寺社を探訪してください。





木造金剛力士立像

都指定有形文化財（彫刻）
昭和39年4月28日指定
昭和51年7月1日種別名変更

仁王門の左右にはヒノキ材寄木造りの金剛力士像が安置されています。向かって右側の阿形像は口を開け怒りの表情をあらわし、左側の吽形像はきつく口を結んで怒りを内に秘めた表情をしています。サンスクリット語において「阿」は口を開いて出す最初の音、「吽」は口を閉じて出す最後の音であり、万物の始まりと終わり、悟りを求める菩提心と到達する涅槃を象徴しています。

この像は『新編武蔵風土記稿』に「鎌倉仏師運慶の作」と記されていますが、昭和50年から52年にかけて行われた解体修理の際に見つかった胎内の墨書銘から、鎌倉幕府の御家人で地頭職にあった谷慈孫三郎菅原重光が施主となり、正和3年（1314）に阿形像を仏師肥前房が、正和4年（1315）に吽形像を仏師備前□が制作したことが分かりました。また、「敬白浄土寺」の記載も見つかり、鎌倉時代に浄土寺という寺院が実在したことが明らかとなりました。

動的で激しい忿怒の表情を見せる鎌倉時代の金剛力士像としては比較的温和な形相で、平安時代の遺風をしのばせます。旧武蔵国に現存する仏像として貴重なものです。



吽形

阿形



拝島のフジ

都指定天然記念物
昭和31年8月21日指定

昭島市拝島町一丁目、大日堂前の平地に広がる拝島公園の一角に、広さ約300㎡を超える大きな藤棚があります。このフジが「拝島のフジ」です。

フジはマメ科のツル性落葉低木で、本州中部以西の山野に自生するほか、観賞用として広く栽培されています。

別名「千歳のフジ」とも呼ばれるこの「拝島のフジ」は、室町時代末期、この地にあった明王院の境内に自生していたとされています。寺院は江戸時代初期に廃寺となってしまいましたが、フジだけが残っています。

市内でも有数のフジの巨樹で、樹齢は800年とも言われています。かつてよりは樹勢の衰えが見られますが、それでもなお、毎年4月下旬頃になると藤色の花を咲かせます。房の長さは1mを超え見事で、市内内外からの観光客の目を楽しませています。



拝島のフジ



大日堂境域及び日吉神社境域

都指定史跡
平成4年3月30日指定

天台宗の大日堂とその守護社である日吉神社によって形成された境域は、江戸時代に八王子と日光を結んでいた日光往還沿いに位置しています。寺院と守護社によって形成される、天台宗の寺域の典型として、都内で旧態を留める数少ない場所の一つです。

境域には南側の低地部分に南面して仁王門が建ち、参道を進んだ北側の一段高い部分に、正面に大日堂、東隣に薬師堂、東南に鐘楼堂、西側に日吉神社が位置しています。

大日堂は、密教の中心仏である大日如来を祀った建物で、現在のものは享保17年（1732）に再建されたものです。入母屋造りの五間堂で、現在は銅板葺ですが、元々は茅葺でした。江戸時代中期の仁王門と共に昭島市指定有形文化財に指定されています。薬師堂も修復が見られますが江戸時代前期、鐘楼堂は江戸後期、寛政8年（1796）の建物です。

日吉神社の現在の社殿は、本殿が天保15年（1844）頃、拝殿と幣殿は安政2年（1855）の建立です。入母屋造りの拝殿の後方に、幣殿を挟んで一間社流造の本殿が並びます。いずれの建物も現在は銅板葺ですが、元々は本殿は段板葺、拝殿・幣殿は稀葺だったようです。本殿外周には『絵茶漬指室 卷之五目録』より取られた香山旧九老の図（白楽天他）の極彩色の彫刻が施され、同じく華やかな拝殿の天井絵・板壁絵及び幣殿の杉戸絵と共に昭島市指定有形文化財に指定されています。また、日吉神社例祭である櫛祭は、都指定無形民俗文化財（民俗芸能）に指定されています。



大日堂



日吉神社